

釣れ釣れなるままに

2014年思い出の釣行記 PART. 3

# 狼男と化す 昔小牧東港の大手力 鹿島釣狂



チカ大漁



春の陽射しを浴びて開花し始めたサンパラスル

本日は、21cmの大チカを最大にした大漁節だった。この捕り物の顛末は、後半で明かしたい。

春の陽射しが暖かく雪解けが急速に進み、秋の終わりに庭から取り込んでおいた3年越しのサンパラスルも開花し始めた。だが、海水は例年になく冷たい状況が続いているという。その影響で、日本海のカレイの早場といわれている所では全くの不調を伝えていた。それではということで室蘭港や苫小牧港の座布団カレイはどうかと記事に目を移しても同じような状況だ。唯一、2週間前に苫小牧東港周文埠頭付近でクロガシラが上向き出したという情報が出ていたので、あまり期待を大きくしないようにして、3月29日の昼前に出かけてみた。

漁港区にある防波堤付け根の一等地は、情報が出たためか、釣り人が満杯で入り込むような隙間はなかった。車の中で暖をとっている釣り人に様子を聞くと、朝方にいくばくかの釣果があったがその後は全く駄目だということだ。防波堤の所々で投げ竿を出している釣り人に聞いても、入釣してから一度のアタリも出ないということだった。ただサクラマスを狙いの釣り人が行き交っており、朝方に結構な数が上がったようだ。

フェリー埠頭に続く砂浜で竿を出すことにした。ここは一度だけアナゴ釣りに来たこと

があるのだが、根があり海藻も豊かなところなのでクロガシラの産卵場所にはうってつけではないかと考えたのだ。フェリー埠頭でニシンのサビキ釣りをしている集団が並び、その端に投げ釣りをしている御仁がいたので様子を聞いてみた。朝からやったがさっぱりアタリが出ない。ここは暗くなってから釣果の上がるころなので粘っているのだと教えてくれた。ニシンもさっぱり回遊して来ていないそうだ。

フェリー埠頭から続く砂浜には三脚が立てられ、2名が車の中で待機していた。昨日から1本防波堤に行ってみたが駄目で、この時期はここしかないだろうとの読みで来てみたが、アタリは全く出ていないとのことだ。その砂浜の中間で4本の竿を設置した。うち2本はロケット駕籠に「楽ちんコマセ」を絞り出して遠投を試みた。アタリはもちろん出ない。



フェリー埠頭に続く砂浜で竿を出す



40 cmほどのクロガシラを釣り上げた鈴木氏

お弁当を用意してこなかったもので、竿はそのままにして鶴川の街にあるコンビニで夕飯や飲み物を購入してきた。そして、缶ビールをプシュッとやると、左隣の釣り人の前の渚に棒杭が立てられていてそれにフラシが掛かっていた。何か釣りものがあったのだろうと尋ねてみると40 cmほどのクロガシラが収まっていた。少し、希望が見えた。

エサを付け替える為にリールを巻くと海藻が掛かってくる。仕掛けをサビいてみると根は海際から2段になって横に続いていて、沖は砂地になっているようだ。エサを付け替える為に30分おきに竿を上げたが、エサはそのままの状態に戻ってきた。

夕闇が迫ってきた。フェリーの出航が間近になってきて、邪魔になるのでどけてくれと、埠頭の角で竿を出していた釣り人が追い出されて、私の右に並んだ。唯一クロガシラを手にした鈴木氏は、相棒の成田氏をおいて帰って行った。別れ際に成田氏は「おまえがさっき鹿島さんのカメラで写してもらった映像は、私の大物に取って代わっているだろう」と告げていた。しかし、その成田氏も全くアタリのでない状況に業を煮やして1本防波堤（現在は自衛隊員のプレジャーボートによる海難事故により立ち入り禁止の措置が取られている）に向かって行ってしまった。

その成田氏と入れ替わるように滝川市在住の夕霧氏がやってきた。「この時期は、毎週の

ようにこの苫小牧港に通っている。現在、泊村の原子力発電所が定期検査中、そして福島  
の事故後の原子力安全・保安院、原子力安全委員会による審査のために稼働していない。  
それで、この前に聳え立つ火力発電所が、3号機をはじめ、廃止されていたはずの1号機、  
2号機も含めてフル稼働しはじめた。おかげで、大量の温排水を流して海水が他の海より  
温まり、魚の集まりがよくなってきた。ここ最近ではサクラマスも入ってくるようになり、  
明朝はサクラマスを狙ってミノーを飛ばすつもりだ。潜水夫がこの港の中を潜ったところ、  
崖のような駆け上がりにアナゴが住み着いている穴がいくつも開いていたと教えてくれた。  
ほら、あそこだよ。是非、アナゴの時期になったらやってみよう。去年の5、6月には天  
塩港に通い詰めて3ケタを超す真ガレイの数釣りを経験した。秋はオホーツク海岸でカラ  
フトマスやシャケを狙ってフライ竿を振っている。溪流には魚が少なくなってきてご無沙  
汰しているが、あの小気味よい引きが忘れられずに向かうこともある。また、去年は日高  
海岸のタカノハを追って通いつめて何枚かを手中に収めた。」と話してくれた。私とは次元  
の違う、極めつけの釣り師のようだ。

さて、冒頭の大漁チカの種明かしをしよう。例によって、エサを付け替えるためにリール  
を巻いていると、横切った仕掛けに驚いたためなのか、波打ち際で小魚がピチピチと跳  
ねていくつもの波紋を広げている。例によって夕霧氏が「チカではないのか」と言うので、  
二人して渚に近寄ってヘッドランプの明かりを向けると、小魚の群れが縦横無尽にうごめ  
いている。サビキで狙ってみようかと思っていると、夕霧氏が「タモは持ってきていない  
のか」と言う。慌てて車に積んであったタモ網を持ち出して、その群れに向かって入れて  
みた。一気に20匹ぐらいがタモ網に入った。そして、網目の隙間からポロポロとこぼれ  
て海に戻り、その一部が砂浜に散らばった。チカの群れを追いかけながら渚を走り、次か  
ら次へとタモ網を差し出した。掬っては砂浜に放り投げることを繰り返したのだ。ひとし  
きり砂浜を往復すると群れは沖に去ってしまったのか見えなくなってしまった。今度は砂  
浜に散らばったチカを拾って歩いた。夕霧氏も加勢してくれた。無我夢中でその動作を繰  
り返したので汗が噴き出てきた。防寒着を脱ぎ捨てて一服付けていると、また渚がざわめ  
いている。チカの大群が真っ黒くなって押し寄せてきていたのだ。今度は、私の右隣の  
釣り人も一緒になってタモを手を持ち砂浜を駆け回った。彼はヘッドランプの光りが弱い  
ためにチカの群れを見つけることができずに目暗滅法タモを差し入れた。二人して掻き回  
すものだからチカの群れもすぐに見えなくなってしまった。もう一度やってくるかと待ち  
構えていたが3度目はいつまで経ってもやってこなかった。

午後8時半の満潮時間帯の一瞬の出来事だった。今日は新月の大潮である。チカが産卵  
のために岸寄りしていたのだ。ウミガメやサンゴの産卵、ニシンの群来などは大潮の一瞬  
だと聞いている。釣り仲間からもオオナゴやイワシの群れに遭遇して、砂浜に打ちあが  
ったものをエサにしてよい釣りをした話を聞いたことがあるが、実際に目の当たりにしたの  
は初めてのことだ。オオカミ男が変身するのは満月だったか。今日は新月だがウオーン、

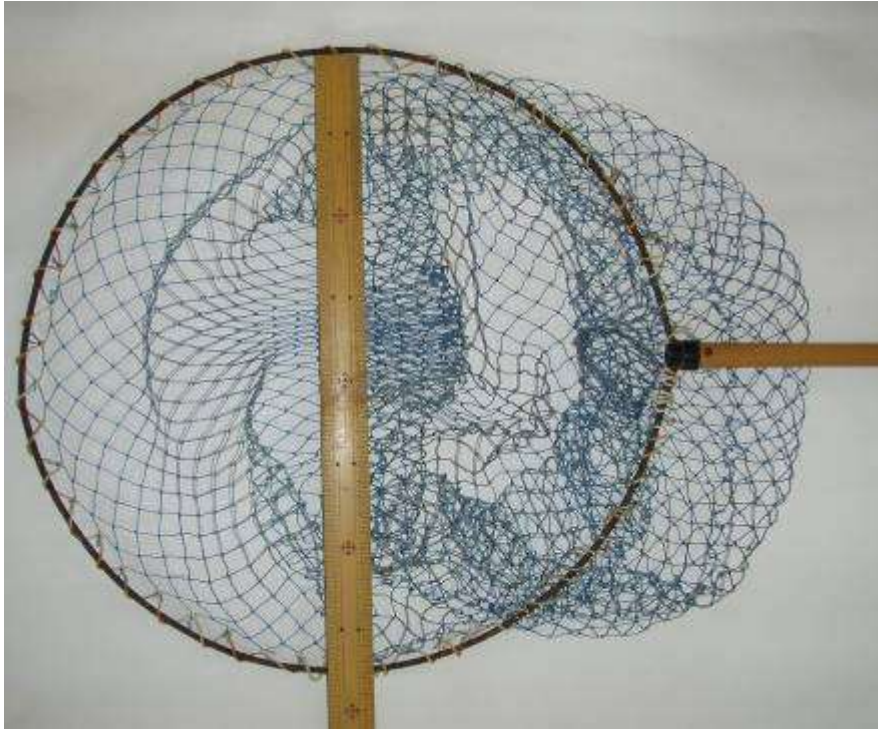
ウオーンと遠吠えしたい気分である。

チカの群れの存在と咄嗟のタモ網漁を教えてくれた夕霧氏に50匹ほどを進呈させていただいた。「いいのかい。こんなに」と言われたが、夕霧氏が示唆してくれなかったら、こんな楽しい営みを経験することは無かっただろうと思うのだ。私がチカに夢中になっている間も、彼は自分の竿先を等閑にすることはなく、見事クロガシラを仕留めていた。午後10時、私の方は、用意したタモ網で座布団級クロガシラを掬うことはなかったが、この貴重な体験をさせてもらった苫小牧港に別れを告げた。

自宅に戻ってから、職場や隣近所にお裾分けするためにビニル袋に30匹ずつ小分けしたら12袋になった。自家用には大型10匹を刺身にした。全て白子を抱えたオスだった。テンプラ用に、煮魚用にもと捌いたがそのほとんどが白子で、そのうちの1匹だけが黄金色の卵を抱えていた。全部を捌き切ったわけではないが、この比率でいうと1匹のメスに100匹ほどのオスが群がっていたことになる。海の中でも女性上位は変わらないか……。



最大21cm、最小14cm



使用したタモ網の口径は38cm。口径40cm以上は違法と聞いているので、このタモ網を持ち歩いている。